

メディアコミュニケーションが心理的健康に与える影響

— 大学新入生の社会的ネットワークと孤独感を中心として —

五十嵐 祐

問題と目的

インターネットの普及が急速に進んでいる現在、コンピュータを介したコミュニケーション（Computer-Mediated Communication）が社会的な注目を集めている。しかし、我が国における従来の研究は、主にCMCを通じた対人的相互作用のメカニズムの解明に焦点が当てられており、CMCの利用が心理的健康に与える影響を検討した研究は少ない。また社会学の領域では、携帯電話の利用が対人関係を希薄化させるのではなく、むしろ選択的な対人関係の形成を促進する可能性（選択的關係論）が指摘されてきた（松田，2000）。しかし、この仮説についても、実証的な検討はほとんど行われていない。

そこで本論文では、CMCの中でも普及率の高い携帯メールのコミュニケーションに注目し、携帯メール以外（対面、電話）の社会的ネットワークと、携帯メールの社会的ネットワークが心理的健康に与える影響を解明することを目的とする。調査の対象としては大学新入生を取り上げ、携帯メールの利用が心理的健康や社会的ネットワークに与える影響を縦断的に検討する。研究1では、入学前からの友人と入学後に知り合った友人とで、社会的ネットワークが孤独感に与える影響が異なるかどうかを明らかにする。また、研究2では、選択的關係論を実証的に検討し、さらに男女による社会的ネットワーク構造の違いを明らかにする。

研究1：大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響—入学前、入学後の社会的ネットワークの

比較を中心として—

研究1では、大学生活への適応の指標として、入学直後から7月にかけての孤独感の変化を取り上げ、大学新入生の携帯メールの利用が大学生活への適応に与える影響を、“携帯メールの効用認知→社会的ネットワークの変化→孤独感の変化”というモデルに基づいて検討することを目的とする。

方法 調査は4月と7月に行われ、携帯メールを日常的に利用している大学新入生83名（男性41名、女性42名）に、孤独感、携帯メールの効用認知（親和充足、利便性、束縛感・不快感）、携帯メール以外（対面、電話）および携帯メールの社会的ネットワークの様態について回答を求めた。

結果 まず、ステップワイズ法による重回帰分析によって、孤独感の変化に影響を与える社会的ネットワークの変数を抽出した。その結果、4月から7月にかけて、入学後に知り合った友人との、携帯メール以外の手段を通じた関係の重要度（以下、“入学後メール以外重要度”のように略す），“入学前メール以外重要度”，“入学後メール送信数”がそれぞれ増加しているほど、孤独感が低減することが明らかにされた。これに対して、有意傾向ではあるものの，“入学前メール重要度”が増加しているほど、孤独感が高まることも示された。次に、構造方程式モデルによる分析を行った結果、Figure 1に示すモデルが適合した。携帯メールの効用認知は、いずれも孤独感と直接的に関連していなかった。これに対して、入学後に知り合った友人との携帯メールのやり取りの増加は、入学後の孤独感を低減していた。一方、入学前か

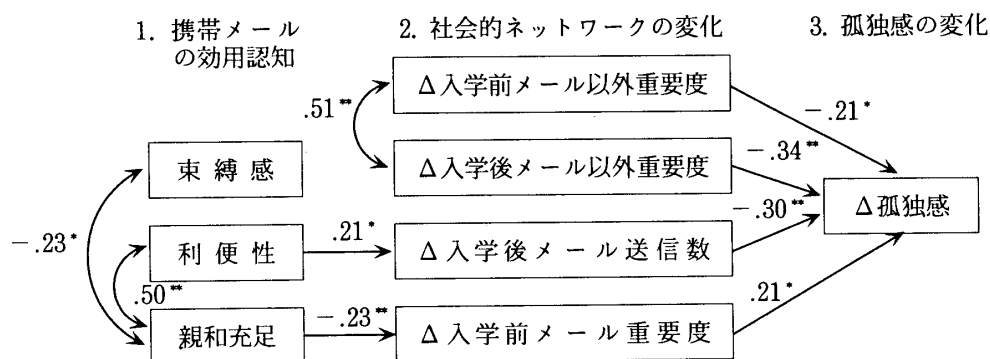


Fig 1 構造方程式モデルによる分析の結果（研究1）

らの友人との携帯メールによる関係の重要度が増加することは、入学後の孤独感を高めていた。

考察 携帯メールの社会的ネットワークについては、入学後の友人へのメール送信数の増加が孤独感の低減に結びついていた。このことは、可搬性の高いメディアである携帯メールの場合、いつでもコミュニケーションを開始できるという即時性が、特に知り合って間もない友人との関係で重要な役割を果たしている可能性を示唆する。これに対して、4月から7月にかけて“入学前メール重要度”が増加しているほど、入学後の孤独感が高まってしまう可能性も明らかにされた。従来の研究では、入学前からの友人との関係への郷愁が孤独感を高めることが報告されている (Paul & Brier, 2001)。しかし本研究では、入学前からの友人との携帯メール以外の手段による関係の重要度が増加することが、逆に孤独感の低減をもたらしていた。したがって、大学新入生の孤独感は、単に入学前からの友人への郷愁によって引き起こされるわけではない。むしろ、日常的な接触は少ないが、より親密度の高い入学前からの友人との間で、直接会うことや電話することの重要度が増加することは、大学生活への適応にポジティブな影響を与えている可能性も考えられる。

一方、入学前からの友人との携帯メールによる関係の重要度が増加することは、入学後の孤独感を高めていた。これに対して、入学後に知り合った友人へ携帯メールを送信することが孤独感の低減につながっていた。一般に、日常的な接触は相手への魅力を高めることが知られている。しかし、CMCを利用するのみでは身体的な近接性が満たされず、孤独感を高めてしまうことも指摘されている (e.g., Kraut et al., 1998, 2002)。すなわち、携帯メールの利用が大学新入生の孤独感に与える影響は、携帯メールの相手と日常的に会うかどうかによって異なる可能性が示唆されたといえよう。

研究2：大学新入生の社会的ネットワーク構造の縦断的検討—携帯メール利用および性差との関連から—

研究2では、選択的関係論の検討を目的として、法学部の大学新入生（一学年）の集団における社会的ネットワークの構造の変化を、男女の比較という観点から検討した。

方法 4月と7月の2回にわたり、法学部の大学新入生132名（男性64名、女性68名）に質問紙調査を行った。質問紙では、孤独感、視点取得、携帯メールの効用認知（親和充足、束縛感）、大学生活への満足感、雰囲気への溶け込み具合などの心理的な側面を評定してもらった。また、ソシオメトリック・テストによって、携帯メール

以外（対面・電話）および携帯メールの社会的ネットワークにおける親しい友人を、それぞれ10人ずつ選択してもらい、相手との関係の親密度を10段階で評定してもらった。

結果 まず、社会的ネットワーク分析を用いて、ネットワークの構造指標を算出し、時期（4月・7月）×接触形態（携帯メール以外・携帯メール）で区分した4つの社会的ネットワークの構造を比較した。その結果、携帯メール以外の社会的ネットワークの密度は、携帯メールの社会的ネットワークに比べて高いことが明らかにされた。また4月から7月にかけて、それぞれの社会的ネットワークの密度が高まっている可能性が示された。一方、携帯メール以外の社会的ネットワークの方が、携帯メールの社会的ネットワークよりも、相手との関係の親密度が高いことも明らかにされた。これは、携帯メールの社会的ネットワークが選択的な対人関係で構成されていることを示唆する。

次に、男女間で社会的ネットワークの広がりパターンに違いが見られるかどうかを検討した結果、携帯メール以外の社会的ネットワークにおいては、女性の方が男性よりも相互に広いつながりをもつネットワークを形成していた。一方、携帯メールの社会的ネットワークでも、女性の方が男性よりも友人の数が多く、広いつながりをもつネットワークを形成していた。

さらに、社会的ネットワークの構造指標と大学生活の適応指標との関連を検討したが、男女とも、いずれの変数間にも強い関連は見出されなかった。

考察 携帯メールの社会的ネットワークの親密度や重要度は、携帯メール以外の社会的ネットワークのそれよりも低いわけではなく、逆に、携帯メールの社会的ネットワークの親密度が、携帯メール以外の社会的ネットワークよりも高いことが明らかとなった。また、携帯メールの社会的ネットワークの紐帯数は、携帯メール以外の社会的ネットワークの紐帯数よりも有意に少なかった。したがって、携帯メールの利用が広く浅い社会的ネットワークの形成を促進するのではなく、部分的でかつ深い社会的ネットワーク、すなわち選択的な社会的ネットワークの形成を促すという、松田（2000）の選択的関係論は、社会的ネットワーク分析の観点からも、おおむね実証されたといえるだろう。また、男女間でネットワークの構造に違いが見られたのは、コミュニケーション方略や対人志向性の相違によって生じたものと考えられる。

全体的考察

本論文で得られた知見から、(1)携帯メール以外の手段による相手との日常的な接触の有無が、携帯メールの利

用と孤独感との関連に影響を与えること、および(2)日常的に接触のある相手との携帯メールを通じた関係は選択的に形成され、さらに形成のパターンには男女差があることが示唆された。すなわち、CMCの利用と心理的健康との関連を明らかにする際には、インターネット以外の手段を通じた相手との関係や、個人の準拠集団における社会的ネットワークの構造、さらに男女によるネット

ワーク構造の違いを考慮して検討を行う必要が示されたといえよう。

今後の課題としては、社会関係資本 (social capital) の概念を取り入れた包括的なアプローチ、面接や実験による社会的ネットワークの形成過程の解明、社会的ネットワークや心理的健康の長期的な変化の検討などが必要となるだろう。